５種混合予防接種（ジフテリア・百日せき・破傷風・不活化ポリオ・ヒブ）の説明

|  |  |
| --- | --- |
| 接種対象年齢 | 生後２か月から７歳６か月に至るまで |
| 望ましい接種年齢 | １期初回接種を生後２か月～１２か月の間に３回 |
| ワクチンの種類 | 不活化ワクチン（不活化混合ワクチン） |
| 予防する病気 | ＜ジフテリア＞ジフテリア菌の飛沫感染で起こります。現在では患者発生数は年間０～１人程度です。ジフテリア菌の飛沫感染で、口や鼻に入って発症します。症状は、高熱、のどの痛み、犬吠様のせき、おう吐などがあります。発熱後2～3週間後には菌の出す毒素によって心筋障害や神経麻痺を起こす場合があるため、注意が必要です。 |
| ＜百日せき＞百日せき菌の飛沫感染で起こります。普通のかぜのような症状で始まり、続いてせきがひどくなり、連続的にせき込むようになります。乳幼児はせきで呼吸ができず、せきのあと急に息を吸い込むので、笛を吹くような音がでます。唇が青くなったり（チアノーゼ）、けいれんが起きることがあります。肺炎や脳炎などの重い合併症を起こし、乳児では命を落とすこともあります。 |
| ＜破傷風＞土の中にいる破傷風菌が傷口から体内へ入ることによって感染します。傷口から菌が入り体の中で増え、菌の出す毒素のために、口が開かなくなったり、けいれんをおこしたり、死亡することもあります。患者の半数は自分で気づかない程度の軽い傷が原因です。この病気は人にうつるのではなく土の中にいる菌が原因ですが、日本中どこにでも菌はいるため、感染する機会はあります。 |
| ＜ポリオ＞ポリオ（急性灰白髄炎）は、「小児まひ」とも呼ばれ、口から入ったポリオウイルスが腸の中で増殖することによって感染します。ポリオウイルスに感染しても、多くは病気としての明らかな症状はあらわれずに、知らない間に免疫ができますが、感染した人の中で、約1,000から2,000人に1人の割合で手足のまひをおこすと言われています。かつては日本でも大流行した病気ですが、予防接種の効果により、現在は、国内での自然感染はありません。しかし、南西アジアやアフリカ諸国など海外では依然としてポリオが流行している地域があり、このウイルスがいつ国内に入ってくるかわかりません。そのため、現在でもポリオワクチンによる予防は欠かせません。 |
| ＜ヒブ＞インフルエンザ菌b型の略称であるヒブ（Hib）は、比較的ありふれた細菌ですが、まれに血液の中に入り、細菌性髄膜炎、敗血症、肺炎など、乳幼児の重篤な全身感染症を引き起こすことがあります。日本では、年間約1,000人の子どもが細菌性髄膜炎にかかっており、そのうち約6割がヒブによるものとされています。5歳になるまでに2,000人に1人がかかっていることになります。ヒブによる細菌性髄膜炎になると、約5％が死亡、約25％に発育障害（知能障害など）や聴力障害、てんかんなど重い後遺症が残る恐ろしい病気です。最近はヒブの耐性菌が増えているため、ワクチン接種による予防が効果的です。 |

|  |  |
| --- | --- |
| 接種回数 | ●標準的な接種1 期初回接種：20 日から 56 日までの間隔をおいて 3 回1 期追加接種：初回接種終了後 1 年から 1 年半の間隔をおいて 1 回20 日から 56 日までの間隔 20 日から 56 日までの間隔 1 年から 1 年半の間隔初回 1 回目 初回２回目 初回３回目 1 期追加 |
| 実施時期 | 年間通じて実施 |
| 実施場所 | 個別予防接種実施医療機関 |
| 副反応 | 注射部位の発赤・腫脹（はれ）、硬結（しこり）などの局所反応や発熱などの副反応がみられ、ほとんどが接種３日後までにみられています。接種部位の発赤や腫脹（はれ）は３～４日で消失しますが、熱感や発赤の強いときには患部の冷湿布を行います。また硬結（しこり）は次第に小さくなるが１か月後でも残る場合がありますが放置してかまいません。 |